
プロジェクト R

天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロジェクトR

【Nコード】

N5412L

【作者名】

天

【あらすじ】

いつものように立ち寄った母の入院する病室。

いつもと違い眠っている母に、どうしようかと眺めていると、世界が震撼した。

徐々に灰色に染まり硬質化する病室と母。

飛び出した廊下で、病院は迷宮と化していた。

混乱を極める状況の中、自分を呼ぶ声がした・・・。

妖怪や人外、異形のものと共に戦う現代ファンタジー！

昔作成しようと思っていたネットカードゲームのネタを文章に。
カードは成長する妖怪や悪魔などの仲間たち。
親密度によるイベント発生などもある予定でした。

0. プロローグ（空）の少年と遅れてきた乙女

雨が降っている。

激しく、強く。

雨は大地に打ち付けて、そこに立つ木々にも、人にも等しく痛みを与える。

光の差さぬ暗き空の下、高くそびえる石壁の前、地面ならず石壁からも無秩序に異様に群生した木々の中に、3つの影が佇んでいた。

一人はまだ年若き少年。

艶やかな黒髪を雨にしとどに濡らし、りりしいその顔にはりつけている。

少年は項垂れてその目を閉ざし、その身は、雨に打たれる木々によって拘束されていた。

幹ががちりとその身を留め、枝がその指一つ動かせぬように絡んでいる。

そして今一人の男性が、少年に向けて何かを叫んでいた。

暗き曇天の下、比するように輝く長い金髪を首筋でまとめた、碧眼の男性。

はっとするほど目を惹くその男性は、今一息に邪魔するように枝を伸ばす木々を飛び越え、最後の人物へと迫っていた。

フォーマルな黒に近い紫紺のスーツに身を包んだ、男だった。

白銀に近い金髪を、全て後ろに撫で付けていた。

少年と男性の間に立ったそのスーツの男は、地に盛り上がった太い木の根に両手で杖をつき、何気なく立っていた。

男性が今まさにその男に接触する、と思われたその時、二人の間に火花が散って二人は一歩づつ飛び退った。

金髪碧眼の男性がその右手を眼前にあげると白い剣が生じ、スーツの男性が体の前で右手を引くと、手にした杖が黒い剣に変じた。

「邪魔はさせぬ、邪魔はさせぬ!!」

スーツの男が高らかにそう宣言し、笑い声を上げた。

「壊れるのだ！壊すのだ！」

笑いながら飛び掛ったスーツの男は、振り上げた黒剣が軽くはじかれた瞬間、金髪の男に向かってその口から火を噴いた。

金髪の男がそれに左手を翳したかと思えば、そこには銀色の盾が現れる。

「もはや間に合わぬ！お前には救えぬ！」

銀の盾で殴られようとしたのを文字通り空を飛んで避けると、スーツの男は笑った。

「わかっておろう。乙女は間に合わぬ」

金髪の男性の剣から生じた光に身を焼かれながら、それでも男は笑った。

「世界は壊れる。お前は壊れる。世界は終わる！！」

右上から左下へとぼつさと、振り下ろされる白銀の切先。

受け止めようと動いた黒剣ごと、輝く剣は、男を切り裂いた。

しかし男はなおも高らかな哄笑を響かせた。

「お前は、失われる！！」

狂ったような笑い、暗き空の下、男が焦げて消えてもいつまでも響いていた。

ほう、と息をついた金髪碧眼の男性は、右手を軽く振って剣を消す。

銀の盾は、いつのまにか失われていた。

そうして、ゆっくりと囚われた少年へと近づいた。

二人の間が詰まると、少年を打つ、雨が消えた。

見れば金髪の男性は、まるで濡れていなかった。

「おいで」

そう彼が優しく囁くと、その場に一人の少女が現れ出でる。

肩下まで髪を伸ばした、柔らかな雰囲気少女だった。

少女は雨に濡れそぼり、顔を青くし力なく項垂れた少年を見ると、涙を流した。

しかしその両手は、ぎゅっと胸元で握られたままで、細い足はすく

んで、その場から動くことはなかった。

金髪の男性は無言だった。

その次の瞬間、囚われた少年の目が、かっと開かれ、光がもれ出た。

それは明るくもなく、熱くもなく、輝かしくもなく。

ただただ純粋な光。

そうして少年のうちから、力は溢れた。

全ての拮抗を崩す、全ての「光」を奪う、純粋な、「空虚」。

世界はバランスを失った。

扉は開かれた。

魔は溢れた。

守るものはなくなった。

世界は、壊れた。

カラ（空）の少年と、遅れてきた乙女の伝説のままに。

世界の秩序は失われたのだ。

1-1. 崩壊と再生一任された者

学校帰りに病院へ寄った。

どこか空々しく白い病室の中で、母は眠っていた。

口を開きかけ、それに気づいた少年は、起こさぬようにと、黙って病室に足を踏み入れた。

静かに傍に近づき、見舞い客にと用意された丸椅子に腰を下ろす。

近づき間近に目にする母の、こけた頬、筋と血管の浮いた腕。

しかし寝顔は穏やかで、息は整っていた。

確認するでもなく、そう見て取った学生服の少年は、軽く息を吐いた。

少年の立ち寄る時間帯に母が眠っていたのは初めてだった。

どうしたものかと、彷徨う視線の先、窓の向こうで何かが光ったように見えた。

「何だ・・・？」

何かどうしても気になるものを感じ、小さく呟くと共に、確かめようと窓へと歩み寄ろうとしたその時。

光は白い衝撃となって、少年を襲った。

一陣の風が襲ったような。

大きな波に飲まれたような。

地の揺れに突かれたような。

一瞬にして全ての感覚は奪われ、それゆえに体の自由も失われた。

少年は短い悲鳴をあげ、両手を地についた。

衝撃が去り、閉じていた瞳をゆっくりと少年が開いた時、その眼の前の様子に、彼は我が目を疑った。

手をついた薄く緑のかかった白い床が、何かに侵食されるように、くすむように、灰色に少しずつ色を失っていった。

「なん、だ、これ」

知らず忌むように手を離し立ち上がった彼は、何気なく、ベッドの

上の母を見た。

そして、駆け寄った。

母をも、少しずつその色を灰色に失っていったから。

「母さん！」

叫んで掴んだ腕は、掴んだ瞬間色を失った。

まさにその移り変わりの時、自らの腕の下で、柔らかく温かい腕の感触が、硬く冷たく変わるのを感じ、少年はぞっと肌を粟立たせた。

「母さん！！」

両目を開き、少年は必死に母を見た。

両手でその身を揺すった。

色の消失は、今や母の鼻下にまで達し、彼は喉の奥で無言の叫びを上げた。

その間に、母が眠るベッドの色も、彼が立つ床のそれも、天井も、失われていっていた。

「な、んで、だれか！だれか！！」

はっと気づいた少年が、ナースコールを掴み取り、親指で強く連打する。

応答は、なかった。

色と熱の消失は、母の顔を全て覆った。

「母さん！」

再度叫んだ少年は、ナースコールを放り出すと、部屋の外へと飛び出した。

「誰か！」

扉を開くなりそう叫んだ少年は、目の前の光景に、ぎょっと目を見開いた。

病室を出て廊下を挟んで、その向こうも病室だった。

そのはずだった。

だが今少年の目の前にあるのは、電灯が灯されていて、それでも何故か暗いと思わせる、先の見えない廊下だった。

震える足と唇を認めながら、彼は左を見た。果たして廊下は続き、

隣には確かに見慣れた病室があった。

しかし、その隣にもあったはずの病室は、何故だかエレベーターになっ

ていた。

右も見えた。

3つ先に、ナースセンターがあるのがわかった。

力をなくした足で、まろぶように彼はそこへ向かった。そして、その場に立ち尽くした。

何か紙をその右手に持ち、中へと振り返った看護師が。

テーブルに向かい書き込むような姿をとった看護師が。

ナースコールへと手を伸ばした看護師が。

皆そのままの姿勢で動きを止めていた。

一様に、薄く灰色に、色を失って。

「なん、なんだ、よ・・・！」

彼は思わず背後の壁を伝って、ずるずるとその場に座り込んだ。

自分は、きつと泣く。

そう思ったが、涙は出なかった。

余りに非現実的すぎて、何かが麻痺していた。

そうして僅かに我を忘れていた時。

少年は自分の名前を呼ぶ声に、はっと顔を上げた。

>名前を入力してください

1-1. 崩壊と再生二任された者（後書き）

ゲームでは男女選べる予定でしたが、さすがに文ではどっちにもは
できませんでした；

デフォルト名で進行します。

1-2. 崩壊と再生―茅破夜

>名前…布施 了

読み…ふせ りよう

「了！」

声の聞こえた方、自分がやって来た方向でもある右手に顔を向けると、そこには見慣れた姿があった。

凛々しく、けれど儚くも見える、類稀な美貌をもつ彼の自慢の親友。知らず息を吐きながらその名を呼んだ。

「茅破夜……」

封神茅破夜は、異様に姿を変えた病院の中で、それでも美しかった。ほうしん ちはや無事な知り合いに出会えたことにも、その変わらぬ姿にも、彼は安堵を覚えた。

呆けたように廊下に座り込む了に走り寄ると、いつになく真剣な声音で茅破夜は尋ねた。

「大丈夫か？」

余りに普通な問いに返って違和感を覚え、理解に一瞬の時を要した。

「オレは……大丈夫。だけど……」

視線の先には、動きを止め色あせた三人の看護師。

そして近くの病室には、彼の大切な母親もまた、異様な事態に見舞われていた。

茅破夜は、了の返答に軽く頷くと、彼に立ち上がるように促した。

「わかってる。多分原因も……」

その言葉に、立ち上がった了は、思わず詰め寄るように尋ねる。

「原因！？なんで！」

その興奮した肩に宥めるように手を置いた親友は、

「その前に、安全な所に移動しよう」

と軽くその手を押して、来た道を振り返った。

「だけど、母さんが」

そう異を唱える了の言葉が終わらぬうちに、茅破夜は再度彼を振り返った。

「この人たちはこのままが安全だ。だけどオレたちは、違う」

まっすぐに見つめられた。

「移動しよう」

その強い口調、表情に、更なる不安と戸惑いがじわりと広がった。大変な事態である事を、今更に感じた。

「『大蛇の巣』おろちのすに」

続けられた目的地は、以前連れて行かれた事のある、小さな喫茶＆BARの変わった店名だった。

茅破夜に従って、まるでその構造を変えてしまった病院を抜け出した。了と会うまでに通って覚えたのだろう、淀みなく歩く親友の後に、彼は続くだけだった。

一人のままでは、迷ってしまっただろう。

戸惑いと孤独に、どうなってしまっただろう。

病院内の人たちは、みんな色を失い動かなかった。

病院を抜けた先でも、目にした光景は彼に目を疑わせた。

荒涼と広がる大地は、まるで日本とは思えない。

見慣れた建物と、知ってはいてもここにはないはずのそれ。見たことの無い何か。

無秩序に並んだそれが、ここが見慣れた町とは違ってしまったのだと彼に教えた。

改めて親友の存在に安堵と感謝を覚えた。

そして余りに平然としたその姿に、原因を知っていると聞いたその言葉に、疑問を感じずにはいられなかった。

茅破夜は、ひどく変わった人間だった。

常識をはずれたその美貌と、いつも不機嫌そうな表情、ぶっきらぼうな態度、加えて纏った冷たい空気は、人を寄せ付けなかった。

更にそれほど際立った容貌でありながら、彼は気配をまるで消したように、目立ちがしなかった。

ちよつとしたきっかけで了とは親しくなったけれど、今でも了を通じてしか周囲の人間と接触を持つとしない。

例外は了が知る限り、身内的な存在だと思われる人たちだけだった。了は勝手に、彼はとあるお金もちの家の子供で、何か事情があつて今自宅にはいけないんだ、と予想している。

彼は中学生にしては、勉強をする様子もないのに博識で、粗雑に見えるのに品があつた。加えて変に子供で、我儘だ。

そして血のつながりのない学校の担任の家に住み、使用人らしい人がある。

このように、彼は了にとって今や一番親しい友だったが、知ることとはほとんどない。

それに不満がないと言えば嘘になるけれど、彼が話そうとしない事を無理に聞くつもりもなかったし、茅破夜が自分を大事に思っている事はわかつていた。

茅破夜は謎が多い人間だった。

それでも、今日は今までで一番、謎だと思った。

無言で進む茅破夜の後について歩きながらそう考えていると、やがて見たことのある扉の前にたどり着いた。

扉のすぐ横に掲げられた、『喫茶&BAR 大蛇の巣』と書かれた、年月を感じさせる木製の看板。

病院から5分もしないうちの事だった。

こんなに近くだっただろうか、と一瞬思ったが、今のこの町の有様で、以前近かったとか遠かったとか、当てになるはずもない、と思ひなおした。

先に立った茅破夜が、無造作に重量を感じさせる扉を押し開いた。軋みながら開く扉の音と共に、小さくベルが鳴いた。

1-3. 崩壊と再生—大蛇の巣

数回訪れた事のある、『大蛇の巣』という店は、ヒゲのマスターの営業する、小奇麗な店だった。

テーブルや椅子は全て木製で、どこか温かく馴染んだ空気を漂わせていて、とても居心地がいい。

所々に掛けられた絵の入った額縁や、飾られた花も控えめでいて洒落ていて、本当に驚いた。

とてもヒゲのマスターの手によるものとは思えにくい。

きつと花は、ウェイトレスの可愛いお姉さんが用意しているんだろうけど。

じゃないとちょっと嫌だ、と思ったけど。

昼間は喫茶店で、夜にはBARになるという。

メニューは昼のものしか見たことがないが、コーヒーだけでなくジュースや軽食、デザートも豊富で、小さな店なのに、とこれも驚いた覚えがある。

いつか母が退院したら、一緒にみんな来て見たい、とひっそりと考えていた。

今その店内に十数人がいて、扉を開くと同時に、ざわめきが止まり、その視線は一斉にこちらへと向けられた。

多数の人のいるその店内は、全ての照明が灯されていて明るかった。その明るさで、外が薄暗かった事に初めて気づく。

太陽はもう低かっただろうか？

店内に5台あるテーブルには、それぞれ数人の人が分かれて座っていた。

カウンターにも2人座り、その間近に同じく2人、立っていた。

中にはいつも通り、ヒゲのマスター。

そしてカウンター近くに立つ人物、その1人は了と茅破夜の学校の担任、天石諏訪^{あまいしすわ}だった。

わりと整った容貌をしている気もするのに、どこかぼけた雰囲気、いつ見ても羽織っている白衣、眼鏡の奥の穏やかな眼差しが、とてもハンサムには彼を見せない。

生徒や保護者にはとても好かれるが、結婚や恋愛には縁遠そうな理科教師だった。

おまけに若干天然なせいも、場面によっては逆に生徒に面倒を見てもらっている感さえある。

「先生！」

驚き呼んだのに、諏訪は安心させるように、いつもと変わらぬ笑顔を見せた。

「布施くん、良かった、無事ですな」

そうして了と一緒に歩み寄った茅破夜にも、頷きと共に笑顔を見せた。

「先生、母が・・・町も、おか、しくて」

その笑顔に安心したためか、喉元にせりあがるものを、了は必死に堪えた。

店内の視線はばらついたが、まだいくつかはこちらに向けられている。

「ええ・・・でも大丈夫、お母さんは大丈夫です。」

項垂れた肩に、温かい両手が乗せられるのを感じた。

「今私たちにわかつている事を、説明しましょうね」

諏訪は、まるでいつも教室で理科の原理を語る時のように、穏やかに告げて了に近場のテーブル席に座るよう促した。

その隣に、茅破夜も腰を下ろす。

その時になって、そのテーブルに、そう自分達と年の変わらない一2つくらい年上だろうか？少年たちが座っている事に気づいた。

他の人間は、了たちから見れば、大人と言える年代だ。

ちょうどこちらを見ていた、大きな目が特徴的で、子犬みたいな印象の少年と目が会って、小さく会釈をした。

少年から人懐こい笑顔を返される。

もう一人は、透けるような白い肌をした少女だった。

茅破夜ほどではないけれど、冷たい印象を与える整った横顔で、カウンターの方を向いていた。

「説明は私が行います」

諏訪ともう一人、カウンター前に立っていた男が、一歩前に出た。応じて諏訪は、後ろへと下がる。

男の声は硬質で、あまり温かみを感じられなかった。

髪は金髪で、明らかにその顔は日本人ではなかったが、そのせいではないように思われた。

はつきりと言ってしまえば、内面の堅さが現れたような声だった。

男はしっかりと金髪をなでつけ、びしっとスーツを着こなし、見た目からも堅さがいかに窺える。

「私の名前は重要でなく意味も持ちませんので、ここでは割愛させて頂きます。ただ」

ここで男の視線は店内を見回した

「ここに今お集まりの皆さんならご存知でしょう、フォーリル・レストイの部下とだけ」

店内に流れた空気は、やっぱり。予想通り、と言っているように感じられた。

了も、その名は知っていた。

茅破夜と遊びに尋ねた諏訪先生のお宅で、何度か会ったことがある。陽光みたいな金髪で、目が碧で、一目で好意を持ってしまいそうな、はつとするほど格好良い人だった。

しかし予想に反した屈託のなさで、全然似ていない爽やかさで、茅破夜の父親だよ、なんて笑った人だ。

その直後、実に痛そうな茅破夜の蹴りを食らっていた人だ。

本当かどうかはわからなかったけれど、少なくともその人は茅破夜を大事に思っているみたいだったし、茅破夜も素で話していた印象が強い。

茅破夜の数少ない心許す人なんだろうな、と思った。

ちらり、と視線を向けた先で茅破夜は頬杖をついて、相変わらず不機嫌そうな顔をして男を見ている。

「彼は今回の事態を予想していました。そして、その事について、私たちに予め指示を行っていました。今、皆さんに説明を行っているのもその指示の1つです。」

皆彼に注目し、静まり返っていた。

「まず事実を申し上げます」

ヒゲのマスターが磨くグラスの、きゅ、と立てた小さな音が、不自然に響いた。

「世界は、崩壊しました。」

1-4. 崩壊と再生一人外

「世界は、崩壊しました。」

静かだった店内は、いよいよもって、しんとした沈黙に支配された。

「正確には、バランスと均衡を失い、ほぼ、崩壊状態にあります」

四角四面な話し方をする男は、店内の雰囲気気を気にする風もなく、改めてそう言い直した。

「この事態を予測したフォーリル・レスティが既に手を打った事で・・・」

ここで男は一瞬表現に迷ったのか、言葉を切った。

「・・・我々のような存在を除く、この地に生きる者は、既に保護されました。」

崩れたバランスさえ戻されれば、無機物も元の姿を取り戻すでしょう。」

男は、幾人かが話についてきていない事に気づいたのか、ううん、と小さく咳払いをするにつけ足した。

「・・・皆さんが既に目にした色のくすむような、見た目の変貌と硬直現象、あれは保護する力に守られた結果です。」

これからさらに崩壊が進んでも、何者かが害を与えようとしても、そのものが損壊しないよう、守られている姿です。」

了はこの時、自分に大きな恐怖を与えたあの現象が、予想されたものと、まるで反対である事を始めて知った。

茅破夜や諏訪の「大丈夫」という言葉の意味を知った。

膝の上で握り締めていた両手が、僅かに震えた。

「崩壊によって生じる問題ですが、まずお察しでしょう、空間と空間のつながりに異常を来たしています。」

今は一旦この形で止まっていますが、また動きのある可能性があります。ます。

つまり、何度も空間のねじれや移動が繰り返され、目的地があった

としても、その位置は常に流動し、たどり着くのが困難となる可能性が高いのです」

それで病院内も外も、まるで以前と様子が違ったのか、と了は理解することができた。

同じテーブルの僅かに年上に見える少年は、隣の少女に説明を受けているようだった。

「そしてそれはこの世界内だけに留まらず、隣接、重なる他の世界との接触点も乱れ、所謂扉が開かれた状態となってしまうつまり・・・他の世界の魔や異形が押し寄せ、さらなる混乱が巻き起こるでしょう。

何よりもそのために、生きるものたちは守られた状態にあるのです」世界っていくつもあったのか、まるでファンタジーだ。

まさに今ファンタジーとも言える異様な状況下におかれているのに、了は暢気にそう思う。

それにきつと・・・魔や異形というのは、化け物とか、モンスターとか、そういうもの？

ますますファンタジーだ・・・了は呆氣にとられていた。

「布施了くん、蒼行空くんあおゆき そら」

そんな時急に名を呼ばれ、了とその隣の犬っぽい少年は、あからさまに驚く様を晒した。

「急に言われて理解し難いかもしれませんが・・・あなた達が想像に遊ぶのに近く、世界はいくつも存在し、そして人ではない化け物もまた、存在するのです」

言葉が切られて、男の視線が二人の隣へと注がれた。
茅破夜と、白い肌の少女へ。

「今ここにいる、君達二人以外は皆、人間ではありません。
隣に座っている、君たちの友人も含めて」

「・・・え？」

隣の空と呼ばれた少年の声が耳に入った。

了は口だけ同じ形に開けて、茅破夜を見た。

茅破夜は真っ直ぐに、彼を見返した。

信じられない事続きで、とても信じられない話で。

だが、冗談を言っている雰囲気ではなかった。

何より話し手が、冗談を口にできるようには見えない。

そして茅破夜の顔を見て、本当なんだ、と思った。

茅破夜も冗談とは縁遠い性格をしていたし、嘘は嫌っていた。

そうして、余りに繊細にすぎる彼の美貌が、風変わりにすぎる彼の数多い謎が、人間じゃなくて返って普通なんじゃ、と了に思わせるに到った。

「なるほど」

了は思わずそう呟いて、目の前の茅破夜に何故か、物凄く嫌そうな顔をされた。

なんだ。

そして隣から、

「・・・うん、別に美崎が何でも、友達だし！
大嫌いな虫でもオレ・・・う、うわ、ごめっ！」

という慌てる声を聞いた。

何か地雷を踏んだようだった。

しかし名を呼んだ二人ともに抵抗なく「人でないもの」を受け入れたことを見て取ると、

「・・・さすがに、柔軟性と理解がある・・・安心しました」

男はほっとした様子で息をついた。

改めて顔をあげ、説明を再開する。

「さて、続けさせて頂きます。

そこで私たちはまず、他の世界から来訪する、この地を害する存在の排除を行う必要があります。

・・・戦いが必要となる可能性が高いのです。

争いを嫌う人も多いでしょうが、背に腹は変えられません」
店内に重い空気が流れた。

しかし、そこには徐々に、静かな決意が秘められていった。

「そしてそれに纏まってあたる数人のグループ、その指揮役を、布施さん、蒼行空さん、お二人にお願いしたいのです」

急に話を向けられた了は

「え？」

と聞き返し、隣からは

「ええ！？」

との、もう少し大きな声が上がった。

「なんで、オレたちが！？」

空が勢いよく立ち上がり、そう尋ねた。

了も同じ気持ちで同意を示し、何度も頷く。

「あなた方が、保護対象外となった、【再生に係わる人間】だからです。」

【再生に係わる人間】が陣頭指揮に立つことで、この世界の異形が団結できると、フォーリル・レスティは予測しています」

どちらともなく、二人は顔を見合わせた。

「そしてやがてそれが、世界の再生につながっていくと・・・」

それは責任が重すぎる。

思わず気持ち表れていたのだろう、二人の顔を見ると、始めてそこで、男は笑った。

了は笑えたのかと、そう思ってしまった。

が、何故か笑ったところで、男の堅さは少しも和らがなかった。

「心配しなくても、それはあなた方二人だけではありません。」

日本にもさらに数人、勿論他の国にも、指揮に立つ事になるでしょう人間はいます。

そして実戦前に実力をつけること、協力してくれる仲間を探すための策も、事前にフォーリル・レスティにより考えられております」
了とソラの顔に浮かぶ疑問に男は頷き、続けた。

「互いに模擬戦を行うのです。」

既に会場となるコロシアムも用意されています」
寝耳に水の話であった。

「模擬戦は、5対5で行います。

今後徐々に協力して下さる方にも増えて頂きたいと思いますが、まずは二人の友人である封神茅破夜さん、雪美崎^{ゆきみさき}さんと親しい方にご協力を仰ぎましょう」

了の視界で、幾人かが頷くのが見えた。

「その中で、最初の残り4人となる方を決めましょう。」

その間、蒼行空さん、雪美崎さん、布施了さん、封神茅破夜さんは、それぞれ別室へお願いします。

決定次第、残り4人も向かわせます」

『STAFF ONLY』そう書かれた扉から、4人は諏訪の案内で別室への移動を促された。

1-4. 崩壊と再生二人外（後書き）

対戦型カードゲーム案なので、プレイヤー同士の戦いをコロシムで行うのがメイン行動予定でした。

ゲームでは結果によって仲間^{カード}が増えたり、仲間^{カード}のレベルが上がったりするつもりでした。

マジックだかトラップだか、仲間以外のカード的なものはプレイヤー装備品とか、仲間装備品とかとして徐々に追加できないかな？って思っていました。

あとは仲間から由来する場所変更効果案。

ある正体が悪魔な仲間をパーティにセットすると戦闘開始と共にコロシム内が煉獄化するとか。

5人全員雪女にすると猛吹雪に襲われるとか。

毎ターン炎や氷ダメージ。怖い。

1-5. 崩壊と再生―再生への道

奥に革張りの椅子、そして大きな机があり、手前にテーブルとソファのある、所謂社長室・・・そういった趣の部屋へと通された。

部屋はとても綺麗に片付いており、床に敷かれた分厚い複雑な模様を描いた絨毯も、壁に飾られた額縁やその絵、花の挿された花瓶も、店とは違ってとても高級そうだ。

まるで一流企業のそれ。

喫茶店に何故？

そう目を丸くする了に、諏訪は

「別の空間へつながっていますので」

そう笑って、ソラと美崎を連れ廊下へ戻ると、さらに先へと進んでいった。

部屋には、了と茅破夜が残された。

どうしようかと中を見る了に比べ、茅破夜は遠慮なくずかずかと入り込むと、いかにもクッションの良さそうなソファへ、どっかりと腰を下ろした。

尊大な態度がいつも通りすぎて、了はちょっと笑った。

それを見咎めた茅破夜が

「なんだよ」

と睨むように見上げてくる。

茅破夜の向かいに座ると、

「いや茅破夜だなんて思ってた」

思わずくすくすと声を立てた。

いつも不機嫌そうな顔が、更にふくれる。

「なんだよ、それ」

茅破夜は右手を了へと差し出すと、くるりと裏返してその手のひらを見せた。

柔そうな手のひら、長く細い指の先で、形良い爪がす、と長く伸び

た。

「お前の『いつも通り』じゃなくて、オレは人間じゃない」
茅破夜の心持ち硬い声。

へえ、と了はその手を見ていた。

余り驚きはなかった。

「他にどんなことができるんだ？」

そう聞いてから、無遠慮だったかも、とか、茅破夜が嫌がる質問かもしれない、と慌てて付け足す。

「いやほら、模擬戦とか、何できるか知らないといけないし」

その様子を眺めた後、茅破夜はため息をついた。

元より茅破夜は、やたらとため息をつく。

「オレの正体は、兄ってオレが前言った・・・そいつを元に作られた人形だ。

だから、本当はそいつと似た力を使えるんだけど・・・今、使えなくされてる」

茅破夜は悔しそうに、視線を一旦横へと落とした。

「今は、『人形』としての力だけ。

普通に攻撃と」

長く伸びた爪を軽く振って見せ、

「糸で縛ったり、切りつけたり」

そう言って、ほらよく見ろよ、とその手を了へと近づけた。

目をこらすと、何かが光を弾いてきらりと光った。

細い細い糸だった。

へえ、もう一度了は言って、茅破夜の手元をよく見ようと浮かしていた腰をソファに戻した。

「すげ、かっこいい」

そして笑った。

「・・・単純バカ」

口を尖らして茅破夜は呟く。

それが可笑しくてもう一度笑ってから、

「そういえば他どんな人来るんだろう？
オレも知ってる人いたりするのかな？」

諏訪先生を思い浮かべてそう言ったが、先生はサポートに回っているようだったから、余りこっちには係わらない気がするな、と思った。

「さあ・・・やっぱまずは犬とかじゃね？」
犬？

そう思った途端、どん！と何かがぶつかるような音と共に、扉が勢い良く開いた。

「茅破夜ちゃん、いっしょのぱーちーでしゅよ！」

一緒に聞こえたその声は、少し発音が不明瞭な、子供と思われる高いものだった。

自然下がった視線の先・・・予想された位置よりさらに下がったところで、箱を背負った白い犬が、やはり白い尾をちぎれそうに勢い良く振りながら、四足で立っていた。

いや犬だから普通四足だろうけど。
だけど犬は喋らない。

そうだ、ただの犬じゃないんだ・・・魔物とかなのか。

了はそう自分を納得させた。

「やっぱ、犬」

だらしなくテーブルに頬杖をつき、行儀悪く顔を斜めに扉へ向けた茅破夜が断言した。

「蓬飛^{ほうひ}でしよ、諏訪神社の狛犬でしよ！」

犬は真っ黒で大きな目をこちらへ向けて、自己紹介してきた。

諏訪神社ってことは、諏訪先生のお宅の、神社の子なのだろう。

「布施了だよ、よろしく」

かろうじてそう挨拶した了へ

「よろしくでしゅ！」

狛犬はそう笑顔で？挨拶してから、また茅破夜に体を向けた。

「いっしょでしゅよ！」

全身で喜びを表現しているようだった。

なのに茅破夜はにべもなく

「最悪な事にな」

と切って捨てた。

「なんででしゅかー!？」

犬は鳴いていなくて泣いていた。

そこへ

「そういじめちゃダメやん」

と女性の声がかかった。

「まあうちもあんたの事、あんまし可愛いからいじめたなるけど」
これって地元の？それともどっか別？

よくわからない微妙な方言。

部屋へ入ってきたのは、ショートカットでパンツスーツの女性だった。

20代くらいだろう、さっぱりとした印象と、威勢の良さそうなお姉さん。

「お前かよ」

茅破夜はその顔を見るなり、あからさまに嫌そうな顔をして、

「やん照れちゃって!やっぱ可愛いわ」

と抱きつかれそうになり、

「やめろ、このバカ!!」

必死に体をそらし、腕を出し、抵抗していた。

これは確かに茅破夜と親しい人だなあ・・・

了は呆れると共に、感心する。

でないと絶対に、そんなことできない。

「行鳥茜、夢見鳥ゆー正体よ。
ゆくしり あかね

だから本当は鳥。

で、フリールポライター。今はそれどころやないけど」

茅破夜を抱きしめるのを諦めたらしいスーツの女性は、茅破夜の隣に座るとそうにつこりと了へ笑顔に向けた。

最後の方は苦笑だったけれど。

茅破夜はぶつぶつ言いながら、べったりひつついて座った茜と距離をとろうと位置をずらす。

「ふ、布施了です、お願いします」

茜と茅破夜の攻防に驚いた余り、若干噛んでしまった。不覚。

「かーわい」

最後にハートでもつきそうな笑顔。

うう、顔に血がのぼってしまう。

「あーこのチーム嫌だー」

そこに入り口からそう嘆く声が聞こえた。

頭にタオルを巻いた男が、扉に片手をかけて、がっくりと項垂れていた。

そう言うてから上げられた顔は、ちょい3枚目で若干つりあがった猫目をしている。

「オレいじられるばっかやん・・・止めてくれる人いないやん・・・」

「

何かすごく、うちひしがれていた。

「うじうじせんとさっさと自己紹介しー」

茜の指示に、男は盛大なため息をつく。

「きょーすけ。虎。『大蛇の巣』のコックさん」

あのおいしい料理はこの人が作ってたのか。

「いつもご馳走になってます。布施了です」

座ったままぺこりと頭を下げた。

「ご丁寧にとーも」

片手を扉にかけたまま、頭だけ下げられる。

そしてその足元から、首に珠を下げた犬が、もう一匹部屋へと入ってきた。

蓬飛とは対照的な、子供の高さと幼さはあるが、落ち着いた声。

「菜翔だ。蓬飛の兄をしている」

「あ、布施了です、よろしく」
ぺこっと頭を下げた。

犬だけど、子供だけど、何かそうしなければいけない気が・・・
菜翔はかちかちと爪で床を鳴らし、部屋に入ってきた。

テーブルへと近づくと、厚い絨毯に吸い取られ、その音は消える。

後からきょーすけが、扉も閉めずに入ってきて、空いている了の隣に
「隣お邪魔ー」

と腰を下ろした。

1匹の犬は茅破夜側のソファの横に既に座っている。

もう1匹は、了の側に腰を落とした。

勿論先が、茅破夜大好きらしい蓬飛の方だ。

「自己紹介は済みましたか？」

皆が思い思いに落ち着いたところで、そう声がかかった。

全員が視線を向けると、扉の脇にフォーリル・レスティの部下と名乗った男が立っていた。

「では軽くお話を」

そこで開け放たれていた扉は閉められて、男が間近へと歩を進めてくる。

「皆さんがまず行うべきはコロシウムでの模擬戦でしょう。」

そこで戦う事で、興味を持った魔などが、さらに皆さんに協力してくれるでしょう」

ここまでは既に説明したでしょうか。

男は皆を見回して理解されていることを確認すると、先を進めた。

「コロシウムへの移動は、ゲートを使ってくださいます。」

そうしない事には、空間が安定しない現状では、なかなか辿り着けないでしょうから。

・・・ゲートというのは水と水、影と影などを媒介に移動する手段の事です。

特別な力を持つものが、それを扱うことができます。

重要な施設各地に、そうした力を持つ者が待機し、ゲートを保持す

る手筈になっています。

『大蛇の巣』には、皆さんご存知の渡風乎さんわたりふうこがいらっしやいます」
確かそれは、ウェイトレスのお姉さんの名前だった気がした。

肩下までの長さの、茶色がかった、が自然な髪色の、笑顔がとっても可愛い、高校生くらいのお姉さんだ。

了くらしい年代の男の子なら誰でもちよつと憧れてしまいそうな、守りたくなってしまう感じの女性だ。

「・・・申し遅れましたが、その移動手段やコロシアムの維持管理、全体の統括や再生への指針の決定は、弊社・・・フォーリル・レスティの傘下にあるグループ社員一帯となって行わせて頂きます。

世界崩壊の進行具合や空間の現状、他の世界からの侵攻情報など、あらゆる必要情報も、我々が常に最新のものをお伝えさせていただきます。

全力でサポート致しますので、そのつもりでお使ください」

何となく、すごいスケールの話のような気がして、了はただ気圧されて頷いた。

「そして他の世界からの侵攻への対応、世界安定化のためへの動きを、お願いする事となります・・・。

それがやがて、世界再生へつながっていく筈です。

大変な道となりますでしょう。

ですが皆さん、どうぞよろしくお願い致します」

男は深く頭を下げた。

道は始まった。

1-5. 崩壊と再生―再生への道（後書き）

茅破夜はお子様。

了相手だと子供っぽくなってしまいうので、知らない皆さんに受け入れられるか不安だ・・・。

茅破夜はまだあんまりクールな面は見せてない気がしないでもないです（苦笑）

そして犬が出ると色々台無しなのはよくわかっている。

最初からネームドメンバーですが、ゲームでは最初、名前なしの仲間しか使えないようにする予定でした。

茅破夜も話だけで最初はパーティに加えられず。

プレイヤーレベルによって、使用できるカードのランクに制限をかけるつもりだったのです。

でもお話ではそうもいかないので最初から名前ありのキャラクターたち。

後の方では戦闘するカード（仲間）と別にサポートカード（する仲間）を一人つけれるようになるとかはどうかなーとは思ったりもしました。まだ未定。

色々濃くて五月蠅い。

でも茜ねーさんは一番まともな人だと思うんだ。

2-1. 模擬戦ーコロシム1 (前書き)

※構想を練っていたゲームを元に書き下ろした文章です。

2-1. 模擬戦—コロシウム1

「あ、みんなこんにちは！」

やって来た了たちを見つけると、渡風平はいち早くそう声をかけてきた。

「こんにちはーお世話になります」

「よお」

「ちはー」

「こんにちはー久しぶり！」

「こんにちはでし！」

了を含め、みな思い思いに挨拶を返す。

「コロシウムへ行くのかな？」

風平が皆の顔を見ながら、にこりと笑った。

周囲の空気が温かく、和らいだような錯覚。癒されると感じてしまう華やかな笑顔。

中学時代クラスでちょっと気になっていた女子も、ふわっとした印象の子だったから、了はこうした女の子に弱いのかもしれない。

「ええ、お願いします」

了が頭を下げると、風平は頷いて、

「私は風がないとゲートが開けないの。」

外に出てもらってもいいかな？」

と微かに首を傾げた。

年上だけど、やっぱり可愛いらしいと思ってしまう。

見た目は自分達とそう変わらない気がするが、もう大学を卒業したと聞いた覚えがある。

首肯して、皆ぞろぞろと『大蛇の巣』の外へと移動する。

店から少し距離をとった位置で立ち止まると、風平は一同を振り返った。

「じゃ、ゲートを開けるね」

彼女が両手を空間にかざした後、わずかに風が集まるように吹いた。風乎の長い髪を揺らしながら、風は彼女の手元に集まり、渦巻くように吹き込む。

やがて風が丸く円を描き、ぽっかりと穴を開けると、そこに別の景色が見えた。

一面の白い壁と行き交う人々。

それはコロシアムの光景なのだろうか？

「うん、大丈夫、つながったよ。」

こけたりしないように気をつけてね！

いってらっしゃーい」

花のような笑顔で笑う風乎に見送られ、一行は風の扉をくぐった。

たたらを踏んだと違い、皆華麗に着地を決めていた。

幼い蓬飛さえしゅたつと擬音をつけたくなるような着地をしているのに・・・と思ったが、考えてみれば犬の方がうまいのは当たり前だ。

「ここがコロシウム？」

日本の一体どこなのか。鬱蒼としげる木々を引き立て役に、迫力さえ感じさせるその巨大な建造物を見上げる。

カーブを描く真っ白な高い壁としか見えないその建物は、そう思ってみれば、ローマの遺跡として教科書で見たそれと似ているかもしれない。

というか、いつ建てたんだろう？

こうなる前から？

「でっかいなあ・・・」

感嘆の息をつく。

「多分そうやろーね、入ろーか」

茜が皆を促した。

その建造物にひっきりなしに出入りしている人々は、揃って目に明るい青色の服を身に着けている。

従業員の揃いの衣装だろうか。

しかし、出入口前にはがたいのいい、いかにもな警備担当と思われる方達が直立不動で立っていた。

これだけ大きな建物なのに、そう大きくはなく、入場券の購入口やそのチェックを行う様子もない事を考えると、ここは関係者出入口なのかもしれない。

「あのーこちら、ここで模擬戦やれー言われてきたんですけど」戸惑いながら近づく了とは違い、さっさと進んで行った茜が、青い服の集団にそう声をかける。

「あ、『大蛇の巣』からの方々ですよ？お待ちしました！」入ってすぐ、受付近くにいた女性が、そう声をかけて小走りに出てきた。

その身長は、了より頭1つ分くらい低い。

中学生で成長途中の了の身長は、まだそう高くはない。

それでも茅破夜に勝っているのが、密かな自慢だったが。

それよりもこれだけ低いということは、相当小さい。

女性は少しでも大きく見せようとでもしているように、頭頂高くにお団子を結っていて、やはり目に明るい青色の衣装を身に着けていた。

了たちが肯定するのを見ると

「私、案内を任せました、鈴音と申します！よろしく願いします！」

小さな頭がぴよこん、と勢いよく下げられた。

「ではこちらへどうぞー！」

そして返事を待つ間もなく、鈴音はさっさと弾むように中へと入っていた。

「わんでし！」

蓬飛が代表するように大きく返事をし、一同はそろって中へと進んだ。

2-2. 模擬戦—コロシム2（前書き）

※構想を練っていたゲームを元に書き下ろした文章です。

2-2. 模擬戦ーコロシム2

「まず最奥になりますが、居住区からご案内致しましょうか？
お荷物あれば置かれてから、身軽になって移動された方がいいでしょうし」

学校帰りに母の病院へ寄り、教科書類の入った鞆を持ったままの了や、商売道具のカメラなんかを入れてるというボストンを抱えた茜を見て、鈴音はそう提案してきた。

「そうやね、お願いします」

あっさりと茜が首肯したのに釣られて頷きかけて、了はん？とひっかかりを覚えて止まった。

居住区・・・？

その様子を見てか、鈴音がさらりと説明を付け加えた。

「私にも詳しくはわからないのですが、あ、今空間が不安定とかで。

ここに通って頂くのは非常に困難なので、皆さんにはここに居住して頂くスペースが設けられています。

ちなみに、私たち従業員にもですね。

参加者の皆さんとはブロックが違いますが、良ければ遊びに来てくださいねー」

人懐こく笑う鈴音に、

「え、あ、はい」

と了は頷いた。

慌てた返事に女性陣の顔に笑みが浮かぶのを、気恥ずかしくて見れない。

「場内はとても広いので、ワープポイントがいくつか存在し、そこを經由して移動して頂くようになっていきます。

関係者出入口からですと最も近いのは、ここ曲がって、あ、ここです。すね。

ここは、模擬戦会場と居住区、ショッピングスペースと倉庫へのポ

イントが設置されてて、さらに飛んだ先で東ブロックとか、近いポイントへ飛んで目的地を目指して頂くといいと思います。

便利ですよー」

便利というか・・・ワープポイント？

しかし哑然とした顔をしているのは了だけで、他の面子は当然のように説明を聞いていた。

「ちなみに、この建物も私たちと同じように魔物なため、こんな便利な造りになってるらしいですよー」

につこり、とそう告げられて、了はさらに哑然とした。

いや、建物が魔物だとか、魔物だからワープポイントとか、余計にわからない・・・。

目を白黒させながら、了は鈴音に何とか着いて歩いた。

ゲートはまだ通り抜ける感覚だったのでそう違和感を感じなかったが、ワープポイントの瞬間に目の前が切り替わる感覚は、慣れないことにはしばらく戸惑いそうだった。

「えーと皆さんのお部屋には・・・この模擬戦参加者用のうち、西ブロック、ですね」

手元の資料を見つつ、鈴音はこちらです、とさらに潜って進んでいく。

西ブロックからすぐ目の前のエレベータで7Fへと昇り、到着し扉が開くなり、鈴音は跳ねるように廊下へ出て、弾む声で告げた。

外からどう見ても精々2階建てに見えたのだけど・・・。

「はい、この階が皆さんにお使い頂くフロアになります！

この階にミーティング室、練習場とか完備されていますので、おおよその事はここで済ませることができると思います。

ちなみにこのフロアに入れる人は、チームの方と関係職員だけになっていますので、誰か別の方をお招きになる際にはお知らせ下さいね」

「特定の人間を常に入れるようにもできるんよね？」

茜の問いに

「勿論それもご依頼頂ければできますよ！」

鈴音はこくこくと頷いた。

「諏訪せんせとマスターとラウヴァちゃんとか？ま、面子は後で話そーか」

傍らのきょーすけへ話しかけ、茜は自己完結気味に頷く。

「お部屋は誰がどこを使うのか話し合って決めて下さい。

とりあえず荷物は会議室とかに置いてきちゃって下さい！

次はショッピングスペース行きましようね」

楽しそうに告げる鈴音に見送られ、了と茜は荷物を置きに手近にある会議室へと向かった。

「あの一・・・」

一緒に歩く茜へと声をかける。

「何？」

「こういうすごい建物とか、えーと・・・普通なんですか？」

人間じゃない人には、とつけるのは憚られたので、曖昧に尋ねた。

「いやー普通というか・・・フォルさんだしね」

茜の声は笑いを含んでいた。

「あの人、ホント派手な事とか大仰な事して、人喜ばせるのが大好きやからねー」

可笑しそうな口調には、親しみが籠められてる。

目に浮かんだ微笑には優しさが滲んでいて、いつの間にか入っていた肩の力が抜けた気がした。

「まーこれからショッピングスペースとか、コロシウム本体とかでまだまだ驚かなんと思うけん、氣いつよー持ってたね」

可笑しそうに励まされ、はあ、と頷くしかない了だった。

「えーとショッピングスペースはあ、食品関係とか日常用品とか娯楽品とか、大まかに分かれてるので、まずはどこへ行きたいかでポ

イント移動ですねー」

鈴音は資料を眺めながらふむふむ、と頷いた。

「えー私も皆さんより先にはありますが、ここへ来たの今日が始めてなんで、まだ完璧じゃないんですよね」

えへへ、と照れたように笑らう。

「既に予想されてると思いますが、ここで買えないものはまずないそうなので！」

と勢いよく言ってから、あ！と小さく声を上げた。

「違法なものは売ってません！」

「期待してない」

ここへきて始めて茅破夜がぼそっと漏らした。

茅破夜はすごく無口だが、相手が了や諏訪先生など親しい人でなくとも、こういう時だけ発言したりする。

一同はコックのきょすけの希望で食品関係と、茜の希望で服飾関係のブロックを軽く眺めた。

余りにも広く、店舗数が多すぎるので、あくまで軽くだったが……。

それでも了の目をさらに白黒させるのに十分であった。

世界の食品とか、全てのブランドとか、網羅されても彼にはよくわからない。

二人の目の色が変わるのを茅破夜と共に一步引いて眺めていただけだ。

ちなみに蓬飛はどこへ行っても珍しそうに、楽しそうに走り回り、その後を葉翔が注意を促しつつ見守り歩くといった具合だった。

「ああ、そうだ、大事な事言ってなかった！」

突然鈴音が大声を出し、後でゲームソフトなんて見てみようかななんて淡く考えつつ、辺りを見るとはなし見ていた了は、驚いて振り返った。

「模擬戦に参加されますとファイトマネーが出るそうですので！勝利すればさらに賞金が！」

なので参加された暁には張り切ってお買い物してくださいね。

というわけでいよいよ本題のコロシムに行ってみましょうか！」

鈴音に誘導され、一同は再びワープポイントを抜け、コロシムへと向かった。

飛んだ先にあったいくつかの控え室と救護室を見学し、いよいよ戦いの舞台となる会場へと向かう。

一同が警備と思われる厳つい男達が傍に控える重そうな金属製の扉へ近づくと、傍にいた男の一人が、その扉を重々しく開いた。

果たしてその先に見えたのは、了が少し予想していたように、中央に一段高いステージがあり、その周囲を段になった観客席が囲むという、すり鉢上の構造だった。

しかし思った以上に広く、大きい。

そしてステージの両端に一際高い台が用意されているのは、自分やソラが立つ場所なのだろうか、と了は考えた。

今はステージに戦う者の姿も、観客席に熱狂する人々もなく、忙しく青い衣装の人々が行き来している。

客席の上部には大きな液晶画面があり、今そこには一人の女性が映し出されていた。

画面から聞こえてくる音声は

『・・・となっており、近く各地のコロシムにて模擬戦が行われる予定です』

と告げている。

・・・まさか自分達に関係のある話題だとは思わなかった。

きっと模擬戦中には、その画面に戦いの様子が映し出されるのだろう。

「大まかな場所の案内は以上です。

ご不明な点などはありませんか？

随時色んな施設等が増える事もあると思いますが、それはまた追ってお知らせがありますので」

「施設については特にないかなー」

茜が軽く頷き、

「模擬戦についてはいつ誰に聞けばいいん？」

『大蛇の巣』に説明にきた外人さんとかがまた話にくるん？」と続けた。

「ですね、まだこのコロシウム自体、今日できたわけで、まだ準備が整っていません。

近いうちにいつから稼動するかなど、お話があると思いますので、それまで英気を養っていて下さい。

皆さん専属の秘書のような方もつくそうなので、それも決まり次第ご連絡があると思いますよ」

こくこくと頷いた鈴音が答えるのを聞き

「了解、どうも案内ありがとねー」

と茜は笑顔を返した。

「ありがとうございます！」

「どうもでし！」

了と蓬飛も続けて頭を下げた。

「いえいえ、皆さんがんばってくださいね！」

私応援してます！」

鈴音も小さな頭をぴよこんと下げた。

「私、ファン第一号ですから。

またね、蓬飛くん、菜翔くん！」

大きく手を振って鈴音は小走りに去っていった。

ファンって・・・やっぱり、小動物は強い。

2-3. 模擬戦一初戦（前書き）

※構想を練っていたゲームを元に書き下ろした文章です。

2-3. 模擬戦一初戦

ざわめきが聞こえる。

コロシアムの対戦時選手入口の前に立った了は、緊張を隠せずいた。

その硬くなった背中を、茅破夜がばん、と叩く。

「うわっ」

声をあげてつんのめった了を見て、茜ときよーすけが笑う。

「単なる模擬戦で命とられるわけじゃねーんだし、力抜けよ」

「そうだけどさあ」

茅破夜を振り返り、恨みがましい声をあげた了に、茜も声をかけた。
「まーうちに任しときーあんたは大船に乗った気いでおるとい
んやって」

そうは言っても、全体の把握と指示を行う了は、責任の重さを感じ
ずにはられない。

自分自身は安全で戦わないのだから尚更だ。

戦えと言われても、人外のひと達と張り合える力なんて勿論ない
だけだ。

「心配しなくても、オレらは強いぜ」

「そうそ、こちらが勝つって」

「わんでし！」

きよーすけの声に続き、口々に励ましてくれるのありがたい、と
いうか返って申し訳ない。

「多少ケガしよーがすぐ治るんだ、気にするな」

再び茅破夜は了の背を叩いた。

今度はごく軽く。

「うん、ありがとう」

その時、外から選手の入場を知らせるアナウンスが聞こえた。
重々しい扉の前に立った男性の一人が、無線連絡を受け、了たちに

視線を向ける。

「どうぞ」

扉はゆっくりと開かれた。

コロシウム内部の照明の明かりと、歓声が一斉に雪崩れ込んでくる。

「じゃあ行こっか！」

「おう！」

「わんでし！」

了の掛け声にきょーすけと蓬飛が声をあげて応じ、茜がそれに続けた。

「がんがんやっちゃおう！」

茅破夜が寄りかかった壁から身を起こした。

扉を潜りコロシウムへと歩を進める。

天井に灯された明るい照明に若干目がくらむ。

一瞬目をつぶり、大きく深呼吸。

『右、赤チームは日本代表蒼行空。左、青チームは同じく日本、布施了チーム。共に初戦です』

ステージ上に立った、ネコミミ、ネコシッポと思しきものを生やした女性が、マイクを片手に声を張り上げていた。

そのアナウンスが空気を揺らして両チームの紹介を行う。

対戦相手は、喫茶&BAR『大蛇の巣』で会った少年、蒼行空。

何でもフォルさんのお膝元である『大蛇の巣』は、他と比べてはるかに対応が早かったため、そうなたらしい。

『続いてメンバーの紹介を行います。赤チーム雪美崎選手』

大蛇の巣で会った、白い少女がステージ上に上がる。

よく似合う、白いワンピース姿だった。

『雪葵選手』

美崎より年かさの、よく似た女性が続く。

白い着物を着て、長い黒髪を赤い髪紐で一つに結んでいる。

『雪雫選手』

さらによく似た、白い着物の女性。こちらはつややかな黒髪を流れ

るに任せている。

3人はきつと姉妹なんだろう、と聞くまでもなくわかった。とてもよく似ている。

『大内寺ノ助選手ー』

ちまっとした男の子がステージに上がる。

野球帽を前後ろ逆に被った所謂悪ガキスタイルだ。

『川井大選手ー』

こちらは了たちと同じ年くらいの快活そうな少年だった。

青いジャージを着て、いかにも運動部所属！といった感じだ。

『そして蒼行空選手です』

空もまずはステージへと登る。

『次は青チームー。封神茅破夜選手ー』

茅破夜が紹介と共に、相変わらざる不機嫌顔でステージ上への階段を登る。

『行鳥茜選手ー』

茜が

「よろしゅーにー」

と客席に手を振りつつ上がった。

『きょーすけ選手ー』

「うあーなんだこれ恥ずかしすぎる！！」

きょーすけが片手で顔を抑えながら登っていった。

『そして本戦一番人気が予想されます、蓬飛選手ー』

「わんでしー！がんばるでしゅー！！」

かわいいー！という歓声に押され、階段を駆け上っていく見た目わんこ。

『同じくふたりで人気を独占しそうな、菜翔選手ー』

「・・・」

同じ声援を浴びながらも、こちらは無言で登っていった。

『そして布施了選手ー』

心臓の鼓動がうるさく鳴るのを感じながら、了もステージへと登る。

そして

「よろしく!」

「よろしくでし!」

「お願いします」

壇上で挨拶を交わす。

「良い試合にしよう!」

にこにこ差し出された空の右手に

「うん、よろしくお願いします!」

右手を差し出すと、強く握られぶんと上下に振られめんくらう。

『蒼行選手、布施選手は指示台へお願いします』

二人がステージを降り、高い位置にある指示台につくと、ネコミミ
ネコシッポなアナウンスの女性もステージから降りる。

そして戦いの合図を告げた。

『それでは、いよいよ、第1回模擬戦スタートです!』

はじめ!』

2-3. 模擬戦一初戦（後書き）

咄嗟に作った相手チーム選手。

雪3姉妹は最初から予定してましたが、名前とか容姿考えてませんでしたw

咄嗟に考えたにしては皆なかなかの名前かな、と自画自賛。

そしてアナウンスといえばネコミミネコシッポなおねーサン。

少女というには年かさな感じでお願いします！（なんの拘りか。

2-4. 模擬戦一作戰（前書き）

※構想を練っていたゲームを元に書き下ろした文章です。

2-4. 模擬戦一作戦

はじめ、の声と共に、了は即声を上げた。

「蓬飛、菜翔、火炎玉！」

「わんでしゅ！」

応じた蓬飛と菜翔の口から次々に炎の玉が吐き出される。

これは、事前に決めた作戦だった。

「さて、初戦の相手が早速決まったわけですが！

今日お集まり頂いたのは他でもない、戦う前に事前に作戦を決めておこーいうわけです！」

初戦が決まった、そう連絡があったその日に、チーム全員に召集命令を出した茜がそう切り出した。

場所は自分達に与えられた居住区のフロア内にあるミーティング室。そこに実に相応しい内容の提案だった。

「なるほど」

四角く机が並べられたその部屋で、椅子に座ってそれを聞いた了は、素直にそれは確かにやるべきだ、と頷きを返す。

了の左に座った茅破夜のさらに左、こちらは小さいので机に座った蓬飛も

「わんでしゅ！」

と張り切ったような声を上げた。

「しかも相手は同じ『大蛇の巣』メンバー。相手の手の内も読みやすいから作戦立てやすいっしょ？」

に、と笑った茜は立ったまま机についていた両手を、腰へとあてる。そして

「確かに」

自分の右に座ったきょーすけの同意にでしょ、ともう一度言い、

「しかもどう考えてもうちらに分があるんよね」

とにやりと嫌な笑い方をした。

理由がわからず一人首を傾げるのに、茜は補足するように説明する。

「相手チームに最初から女の子がおったやん？あのコ美崎ちゃん言うんやけど、雪女なんよ」

はあ。ぴんとこず頷きだけ返すのに、茅破夜が短く告げた。

「雪女だから当然火とかが苦手そうだろ？」

「うん」

頷くのに、横から凄い勢いで蓬飛が飛び込むように声を上げた。

「ぼくたち火吹けるでしょ！！」

「狛犬だからな」

当然だ、と言った口調で菜翔も追隨する。

「そっか、なるほど！」

納得した了の声は、若干模擬線への不安が和らぎ、自然明るいものとなる。

「しかも、多分メンツ的に雪女一族から何人か出ると思うんよね～うちのメンバー関係者多くてなかなかこっちまで人まわらんとと思うし」

メンバーとはおそらく『大蛇の巣』に関わりのある人達で、関係者とはこの模擬戦などの運営側、こっちとは模擬戦参加側のことだろう。

片手を口元にあて、推理するように茜は続ける。

「美崎ちゃんあんまり交友深い方やないし」

な、と同意を求める視線を向けられ、きょ～すけが

「ああ」

と頷く。

「あんま店にも顔ださないよな」

「とすると美崎ちゃん個人やなくて雪女一族と付き合いある一族から、大蛇の巣に多少関わりあるコが出てくると思うんよね」

ここで視線を向けられてわけもわからず了はうんうんと頷いた。

「で、この近くの一族で有名所といったら狸と河童の里」

そういえばせんばやま、とか狸の歌があつたような、とうつすらと了は思った。

そして九州にはやたら川沿いに河童の像がある所があるようだけど、そのせいかなあ、と。

「だからその辺から出てくんやないかと思わん!？」

茜は再度机に両手をつき、乗り出すようにきよーすけと茅破夜の顔を見た。

「そうかもしれんねー」

「かもな」

問われた二人は同意を返す。

「そこだと・・・すぐ出てきそーな若いのはあの二人やな」

きよーすけは椅子を斜めに傾けつつ、思い出すように天上を見上げ続けた。

「寺ノ助と大」

かとん、と椅子を平常に地につけ、視線を茜へ返す。

「ほぼその二人で間違いないやろね」

大人二人は納得げな顔で互いに頷く。

了にはわかるはずもない内容だったし、茅破夜はわかるのかわからないのか、いつも通り不機嫌そうに頬杖をついているだけだった。

そして果たして予想通り、初戦の相手は雪女一族から3名、化け狸の寺ノ助、河童の大の5名だったのだ。

予想が当たったからには、後は作戦を実行していくだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5412/>

プロジェクトR

2011年10月7日05時20分発行